

栄光

『信じて生きる』

説教

詩編30編2節〜13節
ヨハネによる福音書11章23節〜27節

岸 俊彦

説教……………	1
特集・クリスマス、 どんなときも希望 の光……………	2
召天者記念礼拝 報告……………	5
青年会だより……	6
幼児祝福式……	6
伝道師の書き込み…	7
牧師の書斎から…	7
長老のファイル…	8

「召天者記念礼拝」案内」の返

信には色々な便りが寄せられます。毎年出席してくださった方から、「思いがけず難病となり、も

う経堂北教会には何うことができ
ません。自宅で祈っています」と
いう便りがありました。創立1周

年（1938年）の時の集合写真
に写っていた少年の娘さんから、
「父は今年6月に亡くなりました」

との便りとともに略歴が送られて
きました。あの少年を、その生涯
の終わりまで、そして御国まで主

が支え、守り、導いてくださいま
した。「わたしは復活であり、命
である。わたしを信じる者は、死

んでも生きる。生きていてわたし
を信じる者はだれも、決して死ぬ
ことはない。このことを信じるか」

（ヨハネ11・25、26）。主イエス・

キリストに問われて、「主よ、信
じます」と答えて、その方は生涯
を全うされました。

「今年母召天20周年です。母の
年齢を越えました。久しぶりに出
席します」と通信欄に書いてくだ
さった方もおります。

主の恵みは、昨日も今日も明日
も変わることはありません。天と
地をつなぎ、過去、現在、未来を

つないでくださる主を信じる信仰
を、私たちも引き継ぎ、次の世代
へと引き渡したいと思えます。

ヨハネが伝えるキリストの言葉
は、親しくしていたベタニヤのラ
ザロの死に際して、その姉妹マル

タに語られた言葉です。キリス
トは、「あなたの兄弟は復活する」
と信じられないことを言われまし

た。「終わりの日の復活の時に復

活することは存じております」と
マルタは答えました。「あなたが
世に来られるはずの神の子、メシ
アであるとわたしは信じておりま
す」とも言いました。

マルタの本心はどこにあるので
しょう。キリストとマリア、マル
タ、ラザロとは家族ぐるみで親し
くしていました。キリストをよく
知っています。神の子、救い主と

知っています。しかし、救い主は、
故郷や家族には敬われません。親
しいこそキリストを本当には知
らないのです。キリストと共に活

動し、一緒に死んでもかまわない
と言った弟子たちが、最後にキリ
ストを裏切り見捨てました。

キリストは死んだラザロのため
に涙を流し、憤りを覚え、墓穴に
横たわったラザロを大声で呼びま

した。「ラザロ、出て来なさい」。
キリストの大声に目を覚まし、ラ
ザロは復活しました(11:28以下)。

ヨハネは、この物語を奇跡とは
呼ばず、徴と呼びます。私たちに
何かを示すためです。願ひ通り重

病の者が救われたらどんなに嬉し
いでしょう。死者が復活したらど
んなに驚くでしょう。しかし、こ

の徴を通して、今死に逝く者を前
にしても、また御国に召された者
を思い起こすにしても、たとえ
奇跡が起こらなくとも、「わたし
は復活であり、命である……この
ことを信じるか」。絶望の中でも
なおも望みを抱いて、私たちは信
じることができましょうか。奇
跡を目の当たりにしたらキリスト

を信じるのでしょうか。キリス
トが奇跡を起こしたら、神の子、救
い主と実証されるのでしょうか。
キリスト御自身、死者の中から復

活されました。そのことさえ弟子
たちは疑いました。復活のキリス
トは疑う弟子たちに、「見ないで
信じる者は幸い」(20・29)と諭

されました。
どのような時も主が生きて働い
てくださいます。私の中にいてく
ださいます。生きる時も死ぬ時も

共にいてくださいます。絶望、不
信仰、無信仰に逆らって、主を信
じ、賛美するのです。キリストが

私たちに求めておられることで
す。信じてこそ生きることができ
ます。信じてこそ死ぬことができ

ます。信じてこそ復活することが
できます。(召天者記念礼拝説教)

クリスマス、 どんなときも希望の光

今年コロナ禍で
教会としてどのようにクリスマスを
お祝いしたらいいかを長老会で話し合っています。
でも、どんな困難な時代にも、いつもクリスマスはやってきて
私たちに光を照らしてくれました。
今、私たちにどんな風景、景色が思い出されるでしょうか。

希望はクリスマスの朝に

植村泰三

われませんが、まさに至言であると思います。苦しい時期に、己の人生を振り返ってみる貴重な時間が与えられました。僕が教会学校に通っていた昭和30年代に、クリスマスの晩に、家の近くでキャロリングをしてくださったことが思い出されました。寛容な時代であったのです。

最近ふと偶然に一つのDVD作品を見直してみる好機がありました。1960年代に放映されたBen Caseyというドラマです。60歳以上の方ですと、一度はご覧になった機会があるかと思えます。

「うつ病などには自分はならない」という高慢な認識が打ち砕かれ、再度自己の愚かさを確認でき、謙虚になる機会を賦与されたように思われます。罹患した経験がある方もおられるかも知れませんが、苦しく厄介な病気です。仕事での重い軋轢が主な原因であると推定されますが、高齢者となり、心身の衰えが基底に存在しているように推定されます。自己に対する根拠のない自信と、神を恐れない不遜がこのような現実を引き起こしたと、猛省している現在です。「病気は人に反省し己を振り返る好機を与えてくれる」とよく言

この日に見た作品タイトルは、*"I'll Be All Right on Christmas Morning"* というものです。話の大筋は、重い病に罹患してしまった外科医と、小児麻痺のため杖なしでは歩けない理学療法士の心の変化と葛藤を描いています。体に負荷を負っている男女が、クリスマスに希望を見出し、愛を知り、事実を受け入れ、再度歩みだすというお話です。やはりクリスマスは、万人にとって希望の日なのでしょう。

特別なクリスマス

小田瑠恵

この原稿の提出期限日の2日後に葬式の予定です。何という忙しい時期の原稿依頼なのかと、目が回りそうになりました。と言いますのも、結婚式だけでなく、同時進行で家を建て替えることになったものですから、多忙を極めていくというわけです。仮暮らしの古い一軒家で、引越の段ボールと共に過ごし始めて、もうすぐ2ヶ月が経ちます。1日も早く完成させなければと、平日の夜と休日も、朝からハウスメーカーや役所に足を運んでいます。仕事も今年度は例年通りとはいかないことが多い、戸惑いの中で過ごしておりませんが、どんなに疲れて帰っても、暖房のない部屋で寒さに耐えながら寝るだけの毎日です。

仕事のこと、家のこと、結婚式・披露宴のことなど、忙しくて疲労困憊寸前に岸先生からの原稿依頼。1日1日を終えることに精一

杯で、クリスマスを意識する間もなく過ごしていたものですから、メールを見てハッとしました。大切にできてきた大好きなクリスマスをお忘れてしまっていた、と。このところ、日曜日もゆつくり過ぎせず、毎日ただ祈ることしかできていないことも大きな悩みの一つでしたから、こうしてクリスマスを楽しみに待つ時間や、教会について考える時間を与えられたことは大きな救いとなりました。

大好きな経堂北教会のクリスマス。会堂に響き渡る讃美歌。イエス様がお生まれになったことを喜び、皆で賛美する時に、聖霊で満たされる感覚があります。

今年は、様々な制約の中でのクリスマスになることと思います。歴史に残る特別なクリスマスであると感じたいです。また、個人的にも、今年は結婚して初めての特別なクリスマスです。どのように過ごすか、これから2人で話し合つて決めようと思います。クリスマス礼拝もYouTubeで配信されるのでしょうか？画面越しですが、一緒にお祝いできたら嬉しいです。

クリスマスの「匂い」

加用真実

私の脳みその奥に潜在するクリスマスの記憶、それは「匂い」。例えば、オーナメントを飾ったみみの木の香しい匂い。毎年父が花屋さんから担いで来るもみの木。母、兄弟と飾り付けますが、当時のオーナメントはボール紙に銀紙を貼った質素なもの。でも私には一年で一番楽しい時間。ツリーを片付けるまで、学校から帰ればまず玄関の前の応接間の扉をひらく。そこにはもみの木のあの「匂い」。クリスマスが来る！

でも私が一番好きなクリスマスのは匂いにはありません。もみの木が届けばオーナメントを納めた、緑色のヒイラギと赤い木の実のボール箱を押し入れから引き出します。この箱の中には「私が一番好きな匂い」が。匂いの元はボール紙に銀紙を貼ったお星さま。「僕この匂い大好きなんだ」「ママも好きよ、これは村田の匂い」。

当時の私にはアメリカの匂い、たぶん米国宣教師のお土産。この匂いを言い表すのは難しく残念ですが、私のクリスマスの匂い。

もう一つ忘れてならないのは燭火礼拝が終わり、会場で漂う「ローソクの消えた」匂い。

最後に不思議な、しかし大切な記憶の中の匂いが。高校2年の聖書の授業。教師(牧師)は「もうすぐクリスマス。心も明るくなるが、キリストの誕生はすなわち磔への始まりだ。救い主は我々の原罪を贖うためにお生まれになった」と。聖書の授業は数学・物理とは違ひなんとなく緩くワサワサし、中には内職中の奴も。でもその時は一瞬静まり、めったに板書しない牧師の「贖い(読めるけど書けない、今も)」の文字と、窓際に置かれた蒸気暖房の放熱器の匂い。

クリスマス、燭火礼拝とクリスマスキャロル、家族とのデザイナー、プレゼントの交換。すべては次の一年への活力。でも私にはこれに加え大切な思い出の「匂い」があるのです。さて皆さまは、クリスマスと聞いてどのような「匂い」を思い出しますか。

クリスマス思い出

桑田 裕

クリスマスは楽しくなければ、また、楽しまなくては、と思われている方も多いはず。年齢の数だけクリスマスは来ていたはずですし、これからもずっと続くクリスマスですが、一年締めくくりに大イベントですから、そう思うことがあってもよいのかもしれない。特に今年は、我慢したことが多かった年、仕方がないと諦めなくてはいけないことが多かった一年でしたからおさらです。

子どもの頃のクリスマスといえば、クリスマスイブ12月24日の夜です。キャロリングの方々がいらつしやると、普段教会学校では子どもさんびかでしたが、この時は大人の讃美歌と懐中電灯を持って、一目散に玄関から外に出て、一緒にクリスマスの讃美歌を歌う。その時は、目や足が悪く、日頃家から出ないおばあちゃんまで道に出て讃美歌と一緒に歌いまし

た。おばあちゃんは讃美歌を見なくても、最初の出だしさえ周りの方が歌い始めると、ちゃんと歌えました。不思議でした。讃美歌の記憶は、僕たちよりずっと確かでした。家の前で数曲歌うと終わってしましますが、今年もクリスマスが無事迎えられたことに、また久しぶりに牧師先生と挨拶できたことに感謝し、満足して自分の部屋に戻っていきました。キャロリングという教会の外での活動は、普段教会に行かない人だけでなく、病気で行けない人にとっても、クリスマスの喜びを一緒に味わうことのできるとても大切な活動です。大都市の乗換駅前の交差点でたまに聞こえてくる大音量の聖書の言葉よりずっと心に響くことでしょう。

さて、経堂北教会のクリスマスの祝会といえば、聖劇や聖書にちなんだミュージカルでした。祝会は教会員同士の信仰を深める場であつたり、一堂に集まった方々が挨拶だけでなく一言、二言交わす場でもありました。名札でお名前を知るだけでも、大切なことです。次回またお会いできた時のために。

Let it be

圓山野花

困難のときにある
私がそう気づくとき
聖母マリア様が
私の元においでになり
叡智ある言葉をかけて
「しかるようになりますように」と
私が暗いときを過ごす間
私が目のお立ちになり
叡智ある言葉をかけて
「しかるようになりますように」と

この世界の失意にくれた人々が
皆思いをひとつにすれば
答えは必ず見つかるでしょう
しかるべく、そうなりますように
(ビートルズ「レット イット
ビー」歌詞和訳 部分)

主のご降誕を思うとき、当時の

社会情勢は今以上に厳しいものではなかったかと想像します。そんな厳しい中だからこそ、父なる御神様は私たちに大事なひとり子を届けてくださったのでしょ。

最近ではニュースで面白おかしく取り上げられるせいもあってか、声高に正義を主張する傾向が目立ち、危惧しています。多様性が尊重されるべきなのに、正義の名のもとに一つの考えが押しつけられている感じがします。一度失敗すると、社会や業界から抹殺される世相も怖いものがあります。いつから私たちはそんなに偉くなったのでしょうか。神様の領域を侵しているような気がしてなりません。つい傲ってしまふ私ですが、もつと、謙虚に、真摯に、誠実に生きていきたいと思ひます。

主よって救われた私たちは、今、改めて「御心のままに」と、すべてを主に委ねる姿勢に立ち戻ることが必要だと思ひます。クリスマスにあたって、もう一度、信仰の第一歩に立ち返りたいと思ひます。

クリスマスおめでとーございま

召天者記念礼拝

召天者記念礼拝に出席して

有賀裕子

今年の召天者記念礼拝はコロナ禍での礼拝だったため、異例の形ではありましたが、教会のコロナ対策がしっかりと講じられており、無事に礼拝を守ることが出来ました。岸先生ならびに教会員の方々にお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございます。

毎年、教会で召天者記念礼拝が行われていることは知っていましたが、2016年2月に父が亡くなり、同年11月に初めて遺族として召天者記念礼拝に出席しました。今年は5回目の召天者記念礼拝です。岸先生から『栄光』の原稿の依頼を頂いたことで、父のことを改めて思い起こす機会となりました。

父の癌がわかってからの約1年間の闘病生活は、父の希望通り、ぎりぎりまで自宅で過ごすことができました。亡くなる3週間程前から入院生活になったのですが、父は毎日讃美歌のCDやテー

プを聴いていました。母がベッドの横で讃美歌を歌い、父が心地よさそうに聴いていた姿が目につきます。また、毎日孫が送ってきた写真付きのメールをとても楽しみにしていました。メールの返信は寝たきりの父に代わって私が送っていたのですが、本当に心に残る思い出です。入院中の父の穏やかな顔が忘れられません。

私は両親から「神のなさることはずべて時になつて美しい」という聖句を教わりました。私にとって、とても大切な聖句です。この聖句を信じながら「父は神様のお導きで天国に行き、神様のもとにいるのだ」と思うと、父が亡くなったことは本当に悲しいことですが、「お父さん、よかったね」と安堵の思いになり、不思議と嬉しい気持ちにもなるのです。

召天者記念礼拝で最後に歌う讃美歌405番。この讃美歌を歌っているとき胸がきゅんとなり、無性に父に会いたい気持ちが込み上げてきて涙が止まらなくなりました。これからもまだ生かされている命を大切に、精一杯生きていきます。父にまた会う日まで。

召天者礼拝に出席して

鈴木千鈴

毎年召天者礼拝のご案内状を頂きながら出席することが出来ずにおりました。今年は母（富尾木道子）が天に召されて20年を迎えるにあたり、出席を決意いたしました。コロナ禍で不安もありましたが、経堂駅に降り立ち、すぐらんに通りを抜けて教会へ。全く変わらない佇まいに安堵いたしました。そして教会員の皆様の温かい応対に私の心の緊張もほぐれ、2階の会堂へと導かれ母の元へ帰ってきたように思いました。

母はとても家庭的な人であったように思います。子どもの頃は料理、洋裁、お菓子作り等を一緒にしてきました。見習うことも沢山あり、今でもパン作りやおせち料理等を受け継いで母の味を楽しんでおります。教会バザーではエプロン作り等、ハリキッてやっていた姿が思い出されます。晩年乳癌の後遺症に悩まされ、不自由な右手で何事にも挑戦し、出来る限り教会の皆様とのお交わりを求めてリハビリに励んでいました。

母を思いながら会堂に飾られた皆様のお写真を拝見しながら、教会の歴史と天に召された方々の増えたことに驚いているうちに礼拝が始まりました。

岸先生のお説教も解りやすく、心満たされる中で母と共に過ごしているように思いました。親しくして頂いた皆様、感謝申し上げます。そして、多くの方々が天に召され神様のもとで皆様と昔の思い出話が出来ていたら良いなあ、と思いつつ教会を後にしました。

神様の御恵みのもと礼拝に与れましたことを感謝申し上げますと共に、これからも経堂北教会のご発展を心よりお祈り申し上げます。ありがとうございます。

青年会だより



11月6日の夜10時過ぎ、青年会メンバー7人が高尾山の玄関口、京王線高尾山口駅に集合した。夜な夜な真つ暗な高尾山を登る、青年会の恒例行事「高尾山ナイトハイイク」の出発である。

行程は単純で、暗い登山道をゆっくりと登り、山頂で祈祷会とささやかな宴を開いて、ゲームや会話を楽しみ、眠くなったら仮眠をとる。そして、日の出前に目を覚まし、日の出を眺めながら、持参したバーナーで湯を沸かし温かいコーヒートとカップ麺を楽しむ。辺りが明るくなったら下山し、近場の温泉で疲れを取り、解散という流れ。

参加者は、大学生が牧内歩さんと、今年経堂北デビュウの風間響さん。社会人は、諸橋鷹広さんと琴美さん夫妻、村裕真友子さん、狩野先生と原の7名。青年といえども、息を切らしながらの登山で、なぞなぞを出し合つて辛さを紛らわせる始末。暗闇の登山道を、懐中電灯を頼りに進むが、今年はオ

コジヨを発見して大盛り上がり。これまで見られなかった星空も、今回は望むことができた。ただし、日の出は今回もお預けとなった。

山頂での祈祷会では、普段と異なる雰囲気の中、順番に祈りを捧げた。コロナ禍収束への願い、新生活の出会いへの感謝、結婚1周年への感謝、そして神様が創られた自然の恵みへの畏敬など、祈りは多岐に渡った。山頂は冷え込みが厳しかったが、ランタンを囲んでの祈りは心温まるもので、会場の中心に神様の存在を感じることができた。新メンバーと交わりの機会が持てたこと、コロナ禍でも無事にナイトハイイクを開催できたことは、大きな喜びだった。(原良介)

幼児祝福式報告

幼児祝福式に出席して

古賀智彦

私は約2年前から、娘と一緒に経堂北教会に通っております(正確に言うと、日曜日の9時から行われているCSに通っております)。私が経堂北教会に通うようになってきたきっかけは、2つあります。

まず、長女がプロテスタントの学校に通っていることです。送迎することがCSへ通う直接のきっかけになりました。ではなぜ数ある教会の中で経堂北教会に通うようになったのかというと、教会の長老である原良介さんが、会社の同僚であったことです(今は原さんが異動されたため、異なる部に所属しています)。

CSの先生方はみなさん元氣ハツラツ、いつも子どもたちが喜びそうなことを考えてくださるので、娘はいつも教会に通うのを楽しみにしております。私自身も娘と一緒にCSの先生方の説教を聞くことで、毎週多くのことを学ぶ

ことができています。キリスト教の素人である私にとつては、CSで子どもたちに対して行われている説教が、理解するのにちょうどよく感じられます。

下の娘も、お姉ちゃんについていくような形でCSに行っています。幼稚園生なので、座つて説教を聞くのは難しいのですが、お姉ちゃんと同じくお友達と分級で過ごすのが楽しみなようです。幼児祝福式も、2年連続で参加することができました。

長女は「使徒信条」や「主の祈り」を暗唱することができるようになり、成長を感じております。教会と学校が一体となり、娘の人格形成をしてくださっていると感じており、岸先生をはじめ教会の皆様に変感謝しております。

伝道師の書き込み

11月になって、新型コロナウイルスの感染者が急増しています。夏場の流行と同じように換気が難しい時期になったからでしょうか。12月以降どうなるのか、この点は不安にさせられます。

教会ではいろいろなことに中止の決断をさせられながらも、礼拝を継続し、基本的なコロナ対策をしつつ、やれることはやれている、というのはいふぶんありますが

いことだと感じます。祝会はできないながらも召天者記念礼拝を守ることが許されました。幼児祝福式では3人の子どものたちの祝福にとも心合わせることでできまし

クリスマスに向けてツリーやクリブ、リースなどが教会に置かれるようになりました。クリスマス当日はいつもと同じように、とはいかないですが、礼拝だけはいつもと同じように、みなさんと共にお祝いしたいところです。クリスマス祝会はできませんが、教会学校では例年と同じように、ミュ

ージカルの練習をしています。いつもと同じように全員の前で披露する機会は持てませんが、映像を撮って見せられる形にしようとして

着くことがあれば、去年の餅つきの時のようにお見せしたいものです。月報などに記載されているとおり、うれしいことに11月、12月にかけては結婚式、婚約式、洗礼式も立て続けに行う予定ができました。クリスマスに至るまで、さらに色々な喜びが教会に増し加えられているということは、たまた

まのことであるとは思いますが、やはりありがたいことです。ニユースを見ていると不安になるようなことが多い近頃ではあります

ますが、教会の中には(勝手な私見ですけども)なんとなく明るい雰囲気があるような気がしています。気休めではなく、本当に喜ばしいクリスマスを迎えられるように、祈りつつ、今年はそれに加えて教会が閉鎖されないように注意を重ねつつ、アドベントの火を点していくことになりそうです。(狩野進之佑)

牧師の書斎から



NHK連続テレビ小説『エール』を見ていました。1945年6月の豊橋空襲で焼け落ちた自宅の焼け跡に腰を下ろした光子役の薬師丸ひろ子さんが讃美歌を手に、「うるわしの白百合」を歌いました。

1節、2節とアカペラで歌う讃美歌を聴いていて、召天者記念礼拝で歌うことにしました。

その後、番組のキリスト教監修者である西原廉太教授(立教大学)

の投稿が転送されてきました。

「うるわしの白百合」という賛美歌は、イースター、復活を謳う歌である。戦争・死・暴力という『死』と『絶望』。それを悲しみながら、しかし、ただそこに留まるのではなく、未来の平和・生・人間の尊厳という『いのち』と『希望』を願ひ、告げることの大切さ。そこには『死』から『復活』へという、神学的なメッセージが通奏低音のよう流れている。学校のチャペルで「うるわしの白百合」をよく歌ったというご遺族からのメー

ルでした。

召天者記念礼拝に出席してください。さつた方や、ライブ配信を見た方からメールや手紙をいただきました。召天者記念礼拝後、こんな反応があったことはありませんでした。西原教授のブログから転載されたネット記事には百万回のアクセスがあったそうです。

故人愛唱讃美歌として「うるわしの白百合」を葬儀で歌うことはありましたが、主日礼拝の讃美歌として選んだことはこれまで一度もありませんでした。歌詞の内容

や音楽的な問題があると教えられてきたからです。神学的、教会的ということと、私たちの心にあるキリスト教的懐かしさとは必ずしも同じものではないことは分かっているつもりでしたが……。

薬師丸さんの歌が本当に素晴らしかったこともあるでしょう。「世を去ったすべての人の魂と、いま生きるすべてのいのち」を優しく包む祈り」のこめられた賛美でした。

礼拝に主の命溢れる賛美と祈りが満ちますように。(岸俊彦)

個人消息



長老のファイル

今年度の長老会は毎月第2日曜日の礼拝後すぐに始まり、午後1時には終わります。事前には資料を配布して下さっており、内容を確認した上で集まるため、短時間で効率的に行われています。11月の長老会は、年間の礼拝で一番出席者が多い召天者記念礼拝を無事に行うことが出来てほっとした雰囲気か漂っているようでした。

多く、更に高齢者が多いため、コロナ禍が強まり緊急事態宣言が出された時から、岸先生は人が密にならないで礼拝を守るためにはどうしたらよいかとずっと考えておられたのだと思います。そして、多い出席者を密でなく収容するために礼拝を2回に分けることになりました。礼拝出席者をほぼ等分に分けるために過去の記録を確認したり、遺族の方の出席人数を確定するために早めに案内を送付し、その返事を待つて教会員も午前と午後に分けました。礼拝を2

回行うということは礼拝の奉仕者も2倍必要ということで、奉仕の依頼や調整が直前までなされました。当日召天者記念礼拝に出席して私はこの礼拝は、礼拝堂の壁いっぱいに掲額されている亡くなった教会員の方々が神様にお願いで地上に残された愛する家族に御言葉を伝えたいという切なる思いが込められた礼拝なのだと思います。そして、大切な礼拝を守ることが出来て神様への感謝で一杯になりました。

なければならぬことがある中で人が集まり声を出して神を賛美し、祈る礼拝を守り続けることは困難に感じることがあります。しかし毎週礼拝を守り御言葉を聞きたいという切なる願いを神様に祈り続けていければ、困難を乗り越える具体的方法を神様はきっと示してくださると信じています。何が一番大切なのか、そして一番大切なものを見失わないように歩むべき道を私たちに示してくださいと祈りつつ歩んでまいりたいと思います。(鈴木こづえ)

掲示板



- 洗礼式・聖餐
12月13日(日) 午前10:15
- クリスマス礼拝
12月20日(日) 午前10:15
12月20日(日) 午後2:00
- クリスマス・イブ礼拝
12月24日(木) 午後7:00
- ※愛餐会・祝会はありません。
- 新年礼拝 1月3日(日) 午前10:15

編集後記



▽礼拝を休むことなく続けてこられたことは本当に感謝です。そしていよいよクリスマス。気をつけながらも喜びに包まれますように!(沢田)

「栄 光」2020年12月号
日本基督教団 経堂北教会
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂3-21-11
電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038
牧師：岸 俊彦 伝道師：狩野進之佑
編集：栄光編集委員会
Email：kyodon@nifty.com
HP：http://kyodokita.life.cocan.jp